講演 2

眠りSCAN活用事例

(株)リバティー・アソシエーション 代表取締役
(住宅型老人ホーム・デイサービス・ケアプランセンター運営法人)

椛澤 奈英 氏

施設概要

住宅型老人ホーム
デイサービス
ケアプランセンター

2015年に群馬県前橋市で法人を立ち上げ、25床と52床の住宅型有料老人ホームを運営。オープンから1棟目は3年9カ月、2棟目は1年4ヵ月が経過し、2施設とも稼働率100%。

導入の経緯

運営当初より全室に眠りSCANを設置。今まで特養やショートでセンサーマットを使用した経験はあるが、全ての転倒が防げたわけではなかった。それらのセンサーとはコンセプトが違うため積極的に活用することで効果を上げられればと思い、使用することとなった。
1棟目で有効性を感じたので、2棟目の開設時には介護記録と連動する「EGAO-link」という眠りSCANを含むソリューションパッケージシステムを導入。

活用事例

「睡眠日誌」を申し送り時に確認し、睡眠・呼吸・心拍日誌のパターンに変化がある人は優先して訪問。活用事例を以下に示す。

1 入居時、夜間睡眠を確認する
「睡眠日誌」の黄色と青の割合のパターン変化を見て、変化があればプランの見直しを行う

2 体調不良の予見
「呼吸」「心拍」の色の変化とバイタル記録とのすり合わせを行う

3 日中傾眠状態の原因を探る
「睡眠日誌」を確認し、昼間に傾眠状態の場合は原因を探る。体調不良などの場合は受診する

4 排泄パターンを確認
「睡眠日誌」から夜間離床や夜間覚醒のタイミングを見て、トイレのタイミングを推察してプランの見直しを繰り返す。

看取りケアへの活用

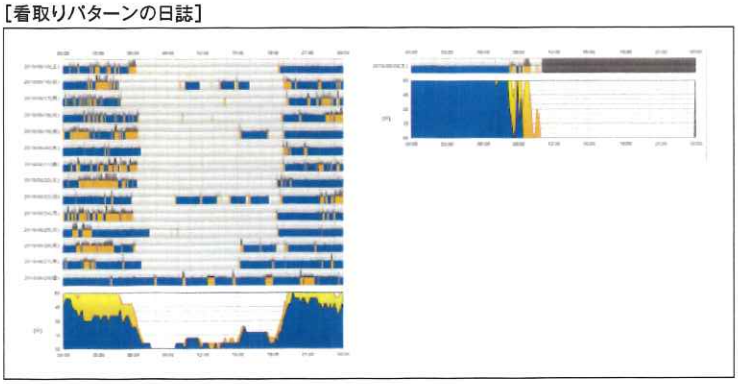
・体調変化の激しい看取り期は、リアルタイムモニターでの呼吸数や心拍数の確認をスマートフォンでも常時行っている。

・「睡眠日誌」を通じて「睡眠覚醒パターン」や「呼吸心拍パターン」を毎日確認することで、医師・看護師に相談するタイミングや、家族同席での看取りができるタイミングなどの推察に使用している。

・看取り記録とのすり合わせを行い、「振動がなくなったときに表示される"離床表示"」を見逃さないように職員に徹底している。

・最期にご家族から「ここに入居してよかった」といわれるように、眠りSCANを重要な機器として位置付けて活用している。

[看取りパターンの日誌]



全床導入におけるメリット 「5つのこと」

1 入居後安眠に至る経過の個別パターンの把握
全入所者の「睡眠日誌」が見れるための、黄色／青色の割合の「パターン認識」することを全職員のルーティンにできる

2 要支援者でも突然死の可能性がある
リスクが低いと思っていた入居者で、夜間頭痛ぐらいの訴えから、早朝突然死の経験をしてから、リスクが低いと思っていた入居者であっても急変可能性は必ずあると思ったため

3 看取りの際、Dr.につなぐタイミングの根拠を持てる
他施設から巡視時に亡くなっていたという事例を聞くこともあるが、巡視の合間であっても眠りSCANの見守りができるため医師への連絡のタイミングが確実になる。このため当施設では死亡時立ち会いがない事例はほとんどない

4 認知症ケアの初期段階として夜間の不安解消の視点から目が覚めた段階の声かけを行う
朝も夜も職員がタイミング良く対応できるため、職員と入居者との関係性の構築がスムーズになる

5 要支援～要介護3までの入居者が多く、立ち上がりの転倒が圧倒的に多い
住宅型ということから、立ち上がることができる入居者が多く、トイレ誘導の際に「覚醒時」か「起き上がり時」なのか訪室タイミングを逃さない